

加入壇下として扱いはわるくついに松尾寺のきもいりて同寺末寺の真言宗大聖寺を北吸に移してこの壇下となつた。

墓は江戸時代から両墓制であつたが明治二十三年現地へ移転のときも昔あつたそのまま、骨は掘り上げて新埋墓へ、石塔は新石塔墓へ移した。このように移転の際でも単墓には直さなかつた。

明治二十三年村の移転前までは川石がたやすく得られたので初七日頃川から五七個拾つてきて埋墓に置いたが、今は附近にこうしたきれいな石が得られないのでこの習慣は続いていない。現地を見るに埋墓にはまんじゅう形の盛土が沢山あつて、それに盆に立てた竹の花立てが残つているだけであつた。お盆などには埋墓、石塔墓の双方に花を立ててお祭りするが、年忌の塔婆は埋墓の方に立てる。また葬礼の時の供膳、位碑、ゴハイ(上家)などは埋墓の上に置く。最近火葬にかわつてきたがやはり骨を埋墓にいけるので土葬の頃とかわらない。

現在の傾向

死と同時に人の魂は肉体から離れて、四十九日の間は母屋の屋根の辺にうろついているのだとの俗信がある。これはわれわれの祖先

のかなり古い思想ではなからうか。当初祖霊崇拜にはこの靈魂を祭ることが主であり、死体は腐りウジがわくから「ケガレ」である。だから遠く離れた別の墓地に埋め、靈魂を祭る墓は別につくるといふ思想から行われるようになったのが両墓制であるといふ程度のこととは想像できるが、今のところはつきりした起原や墓制の内容はわかつていない。

古くから火葬の行われている土地には両墓制がないといふことだけは確かだと云われているが、いずれ舞鶴地方でも火葬の普及とともに両墓制は消滅の運命をもつと云えよう。

真名井の清水について

京都府立西舞鶴高校 地歴クラブ

「初めにあたつて」

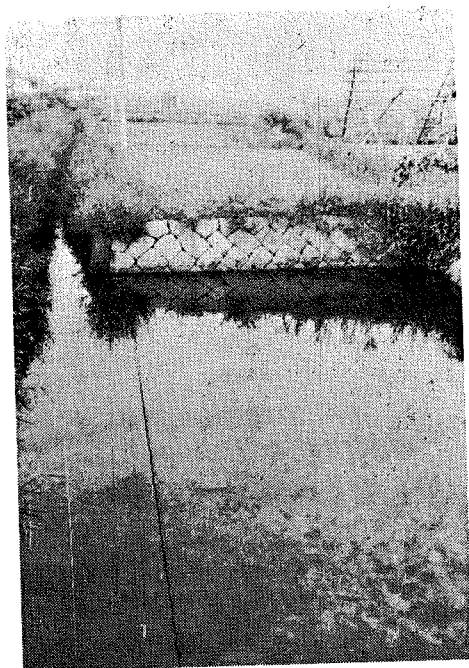
私達地歴クラブに貴重な「舞鶴地方史」誌の一部をさいて下さつたことをクラブ員一同たいへん感謝しております。この研究にあつては、クラブ顧問の坂根・川端両先生に、多大の御指導をいただきました。研究内容は真名井の清水が市民生活に及ぼす色々な影響

丹後一円の両墓制について調査中で、只今官津市の分が判明した。舞鶴市ほど多くはないが舞鶴市に接近した地点や橋北方面にある。このように海岸ぞいの土地に多いのは丹後だけの現象で、他地方では海岸と山間の差はない。

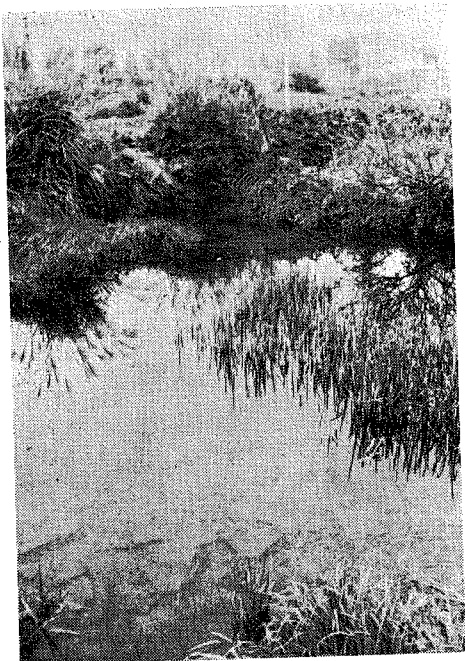
(本稿では「郷土史辞典」を参考にした)

について調べてみました。

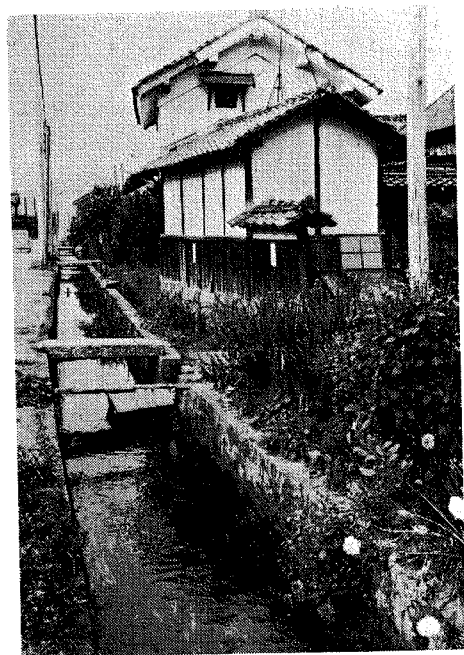
例えば、飲料水としての利用や田畑に及ぼしてきた影響、それに対し農民の立ち向かつてきた歴史、農民の家内工業としての紙漉業など舞鶴地方に及ぼしてきた水の歴史は、農民の生活だけでなく商工業の上にも多大の影響を写えてきたことは、周知の事実です。



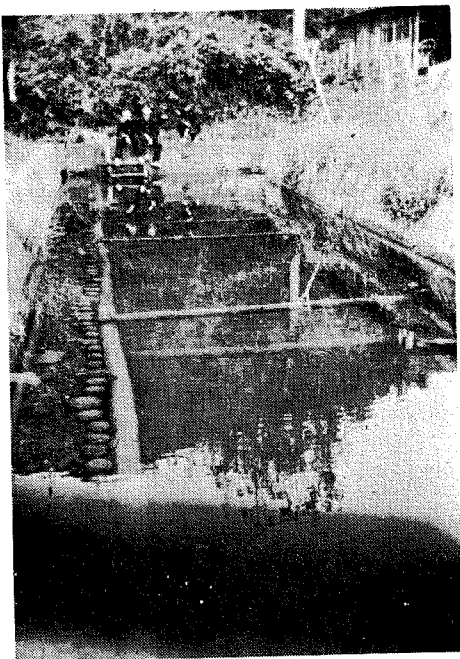
八尺池



真名井の清水



お水道



しゅうず

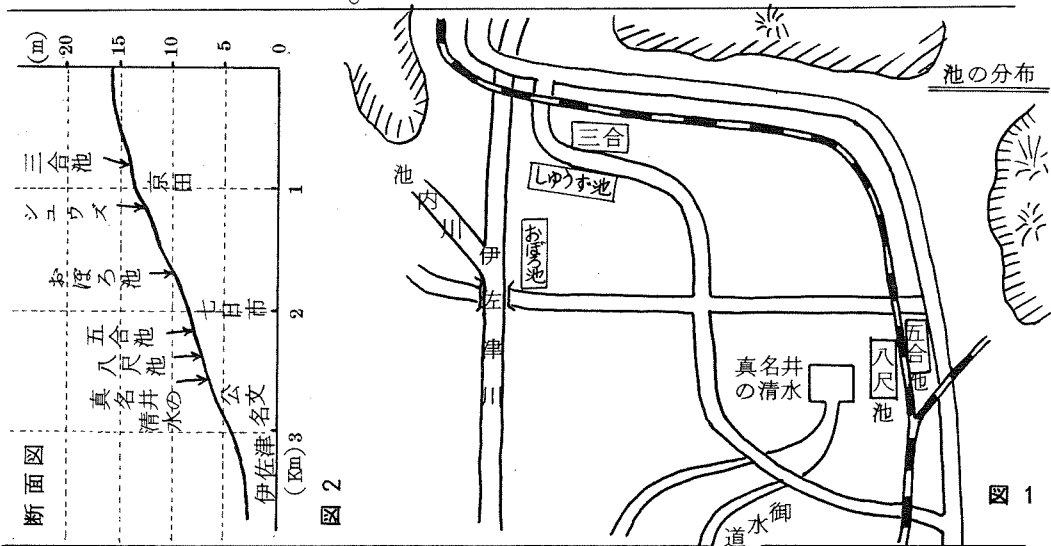
以上のようなことについて、クラブ一同出来る限りのことを調べてみました。不十分ではありますが、こゝに研究結果を発表します。

(一) 真名井の清水の概観

中筋の真名井から流れてくる「御水道」と称する清水は、昔から橋東の大部分の家で使用され、どんな旱魃の日でも枯れたことがないと言われてきた。私達はその清水を調べ、ために京田、七日市、公文名、伊佐津を回つてみた。その結果いくらかの池を見つけ、水源をつきとめた。それはちょうど、中筋小学校より南西の方向にあり水源という感じはあまりなく、草の中にぼつんと、とりのこさされているように見えた。大きさは縦が5m横が2m 50cmくらいで深さは、中心部が深くて約1m 10cmくらいで端の方は1mくらいであった。この池は、福田小一郎さん宅の西にある。その他にも湧水池があつて、おもなものには五合池、八尺池、おぼろ池などがある。

図1に示す通りである。

一体この清らかな水は、どのように流れてくるのであろうか。地形的にみるとこの地域は、山地から流れてきた土砂が堆積してこの付近に平野をつくり、さらに高野川と伊佐津川の運んだ土砂がたくさん堆積して一種の扇



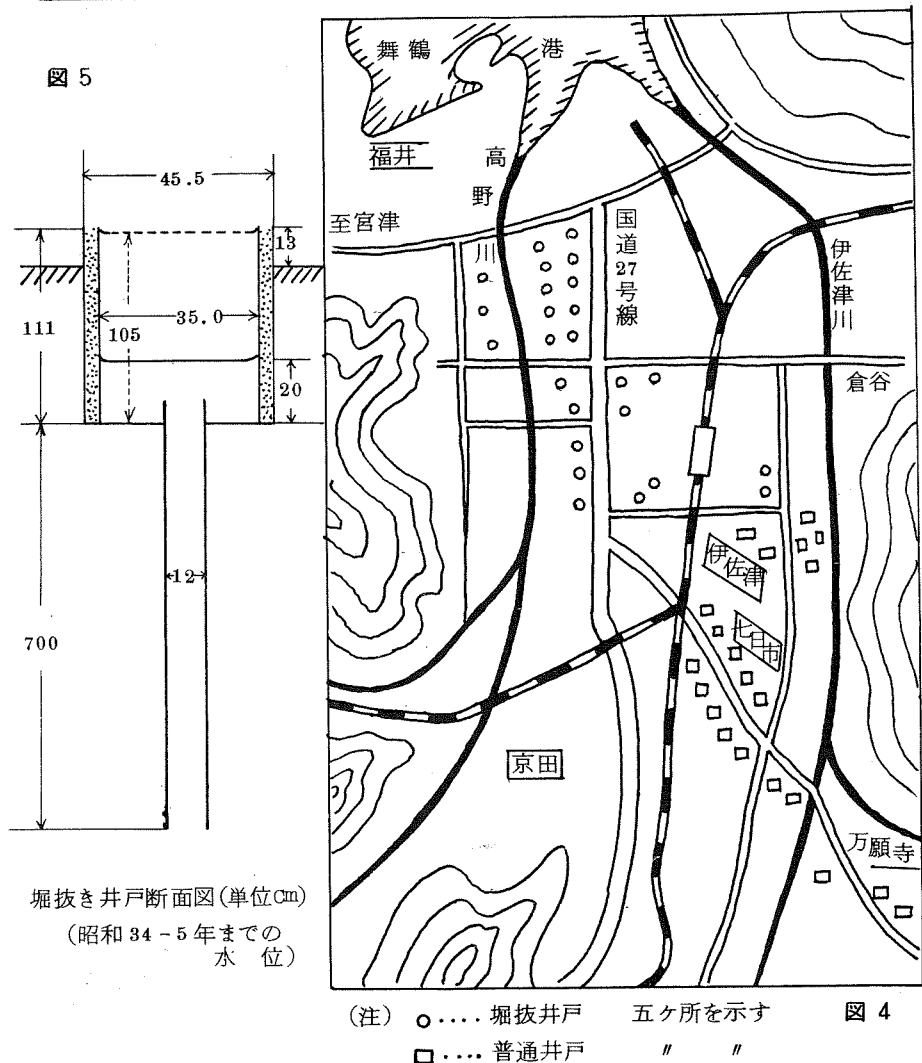
状地をつくり出したものであろう。それは図2のとおりである。上流の方から流れてきた地下水は、扇状地のほぼ扇端部である七日市に泉となり湧き出してきたわけである。

私達は古代から近代までについてこの地域の状況を調べてみました。まず古代については、古墳の分布している場所はほとんど山麓で、それからわかるのはその当時の人々は、現在の平坦部の中ほどには住まずに、山の斜面あるいはその近くに住んでいたことがわかる。これは川が大洪水をたびたびおこしたために、被害をうけるからであろう。

神社が山の近くに多くあるのも同じ理由からである。現在、平安時代の式内社として残っているのは、この地域では倭文神社(今田)高田神社(上安)笑原神社(紺屋町)日原神社(朝代と女布)朝代神社(朝代)である。私達は、式内社ではないがここでは公文名の笠水神社について、その由緒を調べてみた。

笠水神社由緒

笠水訓 宇都一名真名井在白雲山之北地郊而深清如麗鏡蓋是当于豊字氣大神降臨之時所湧出之靈泉也。其深也三尺許其廻也壱百二十二歩。炎旱不乾霖雨亦不溢四時



図によると、水のもつとも豊富なはずの、七日市、公文名のあたりが、掘抜きではなく深い井戸を掘っていることに気付く。これは

自然堤防上のためか、あるいは、不透水層が深く、したがって水が、地下深く流れていることを物語っている。

不見増減。其味也如甘露以萬痛発主治之機焉。傍有二祠東者伊加里姫命或称豊水神矣西者笠水神即笠水彦命笠水姫命之神此則海部直等之所齊祖神也 (以下二行虫食)

右者丹後風土記折衷矣  
明治十二年乙卯十二月穀旦  
惣代 村尾左衛門  
周旋同 太郎兵衛

この資料でわかるように真名井の清水は、古代人にとつてもその生活と切りはなすことのできないものであつたようです。

次に中世についてみると古代人のように、水をさけるだけでなく水を制御することを考えた。そして中世にできた村としては、京田、公文名、七日市、今田など、その地名から推測できる。さらに、江戸時代になると伊佐津川の河道を中央部から東の山麓に移し河跡部分は堤防で守られ、そこに境谷から人家が移され、現在の伊佐津地区が成立した。そしてまた田辺城の飲料水として、いわゆる「御水道」が保設されたのである。新開地の伊佐津村に、真名井の清水が及ぼした影響の一つとして紙すき業がある。そのことについては後述べることにします。又七日市などでは、

この水は現代では、工業用水として使用されている。かつては郡是製絲や山陰紙業があり現在は大和紡績がそれである。そこで大和紡績の水の使用について調べました。この工場も地下水の豊富な場所に設けられたが、最近では不足をきたし、他の所でボーリングを行つている。ボーリング第1号井戸は中筋小学校の裏にあり、その井戸から送水管によつて、大和紡績工場へ送られている。井戸口径750mmで総深度40m揚水量1.5m<sup>3</sup>/minであつた。着工期日は、昭和40年10月25日で竣工期日は昭和41年2月10日。井戸の周辺の地層は図3

大和紡績第1号井戸周囲地層図

深度	ストレーナ	地層	摘要
3(m)		表土 砂	利
6.35	封鎖	砂	利
9.8		黄色粘土	
14.8	封鎖	湿り砂利	
19.7		灰色粘土 湿り砂利	
27.5	封鎖	青色粘土 破大石混り	
37.05		破 岩	
39.5		岩 盤	

図3

(二) 研究の第一として、伏流水の水路をさぐつて見た。

井戸の分布図も示してある。(第四図参照)

真名井の清水の伏流水は、掘抜き井戸(図五)といふきわめて簡単な井戸でもつて豊富な水を得られる。この井戸は、舞鶴山や扇状地の圧力により、毛管現象で地下水の水位が高くなる。これは、オーストラリアの鑽井井戸と原理は同じである。この掘抜き井戸の分布は、折原から、伊佐津川と高野川にはさまれた地域である。清水という名のとうり、この水はきわめて良質の水で、茶の湯や飲料水などに利用されていた。しかし、十三号台風や、大和紡績や、事務所等の冷房による地下水のくみ上げによる影響や、水道の普及などで、井戸の利用価値が著しく減少した。そのため、井戸のある所をさがすのに一苦労した。又、井戸があつたとしても、ポンプがそなえつけてあるため、実働が出来ず、あまり完全な調査というものができなかった。

(三) 第二として、私達はこの真名井の清水が農民にどのような影響を与えてきたかを調べて見ました。

真名井の清水は西舞鶴の穀倉地帯である、七日市、公文名、伊佐津を中心として舞鶴港にそそぎ込む伊佐津川河口までえんえんと四、五kmにわたつてその影響を与えている。しかし七日市周辺の穀倉地帯にはあまりにも豊富な水を与えているので農民の苦難の一つになつていた。戦前の七日市周辺の田はこの水のため、農作業が困難で深い所では腰まで浸かるという状態だつた。そこで七日市の農民は排水工事に立ち上がった。昭和十二、十三年のことである。この排水工事は「暗渠排水工事」と呼ばれている。それは七日市周辺の耕地整理と排水工事を兼ねたものであつた。

その耕地整理は、まず従来の個人所有の田畑を一応全部村の共同管理のもとに置き、その土地を仮配当として、昭和八年、十二年の五ヶ年間で二七二反の全耕地整理を完了した。おむね、一区割を十アール(一反二歩強)とし、端の田は十アール以下に区割した。

完成後、仮配当の田を耕地整理以前の所有田と照合して個人の登記を行なつた。登記事務

暗渠排水工事の意義、目的を達成し、今日に於いてもその難行をたええられている。(図8参照) 『この暗渠排水工事は恐らく京都府下に於いて、農民だけの力で行なわれた暗渠工事としては大事業であり、現在でも少量の暗渠排水工事は随所で行なわれているけれども、このような計画的な大量に共同事業として行なわれたのは数少ないであろう。』と当時の関係者、福田五郎氏は話されている。

(四) 伊佐津川と紙漉との関係

西舞鶴にはほぼ中心に南から北へと伊佐津川に沿って真名井の清水と呼ばれる御水道が流れ、ところどころには現在も池のような形をのこしているところが見られる。かつて江戸時代に田辺城を中心に盛えたこの西舞鶴の民家の生活にとつてかかすことのできない水であつたにちがいない。その流れに沿って現在ではもう行なわれていないのだが、伊佐津川を中心とした紙漉の形跡がみられる。このことを今から研究していきたい。また現在も盛んに行なわれている黒谷の和紙との比較を試みよう。

まず最初に伊佐津川紙漉について「加佐郡誌」という書物に資料がみられる。これは原文のままのせておく。この資料は伊佐津川

つどのように紙漉が伝わつたのかを説明している。

(資料)

伊佐津は、大内郷に属せし所にて古くは、境谷の一部なりしが、何時の間にか人家稠密となり分離せり。

今は、百姓と紙すき人と入り交わり大村也、当字に紙すきの入来りしは、細川幽斎の越前五ヶ荘村より呼寄せられしに始まり、当時は川端嘉左衛門の先祖のみなりし由、其後六十年許を経て、市兵衛といふもの大内町より更に移住し来り川東親音へ行く土居の下り口に二、三軒にわかれて、家を構へしが、此者共は、但馬の豊岡より来りしもの由、今は此処に家無し洪水にて堤防の切れし次来退きし也という。

(京都府教育会、加佐郡部会編集「加佐郡誌」)

ではいつたい真名井の清水とはどこを流れているのか、どのあたりに紙漉をやつていた家が分布していったのかを地図で紹介してみよう。(図九参照) 次ページ

同じく伊佐津川紙漉仲間につくられた儀定寛を紹介してみよう。

この資料は、紙漉仲間とはどんなものなのかこの紙漉業についてどんな法度が作られていたのかをあらわしている。

紙漉仲間儀定寛

御公儀様と被仰出処之御法度之趣急度可相守事。紙漉御運上御上納ニ相かけ申候ハ、其時々紙屋仲間相退ケ可申事。猶又古来申間儀定之儀相定リ有之候得共餘リ年月久しく相成依テ之安永七戌六月又重而相改メ置可申前々之通り此以後男女ニ不限御運上無之家江罷越紙漉申儀出来仕候ハ其本家之紙漉船取上ケ堅ク紙漉事相留申答ニ相定リ可申候為後日仲間儀定仍而如件

右之趣少シニ而茂達背仕候ハ日本国中大小之神社之御爵即座ニ可蒙者也

佐右衛門	茂平	平兵衛
嘉左衛門	平助	源四郎
吉左衛門	治右衛門	徳兵衛
文蔵	与三兵衛	庄三郎
孫市	庄兵衛	善七
善兵衛	庄左衛門	文右衛門
与兵衛	作右衛門	忠左衛門
宇兵衛	久次郎	又四郎
惣五郎	六右衛門	又右衛門
惣八	喜平	八兵衛
四郎兵衛	喜助	安右衛門
甚右衛門	善次郎	又七
安永七戌六月十三日相改り		六兵衛

仲間中

完了は昭和十九年である。

この耕地整理実施関係者は五二戸、七名の耕地整理委員からなり、委員長西川愛蔵氏、副委員長福田五郎氏、西川氏死亡後は福田五郎氏が指導者となり、総工費一万二千元(内四割国庫助成、六割は地元負担)を費やしてこの大事業は行なわれた。ただし、この出勤人夫は殆んど字内の男女で、毎年十一月から五月までの間、晴雨を問わず行なわれ、正月も二日から出勤の記録がある。男九〇銭、女七〇銭の日当であつた。この工事作業一反で人夫八人、材料費等で約十二円を費した。

(但し、当時は米一升三十銭、酒一升一円である。) 自分達の事業として全く犠牲的大事業であつた。

暗渠排水工事の構造を説明すると、畑作の時は水は不必要になるので、暗渠から水が流れるようになっていく。水の必要な稲作時には畦に暗渠道と結びついている土管がたててあつて、その土管に(図6)のごとく栓をためて暗渠から流れる水をためる。それで流れることのできない水は田の上へあふれ出る。だから稲作の時には水は豊富にある。又、稲作期がすむと、栓をぬく。幹線は地下九十センチメートルの深さまで素掘りし、真中に孟

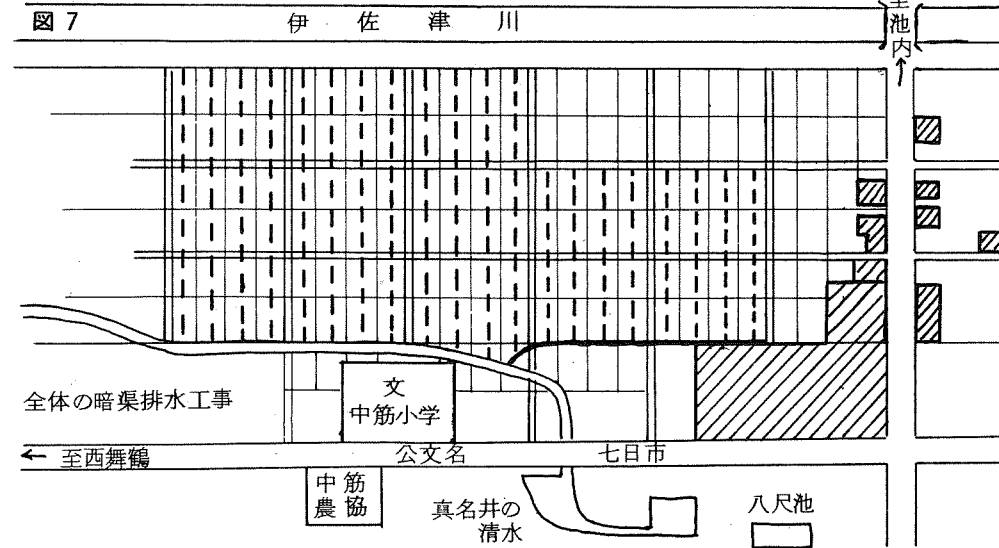
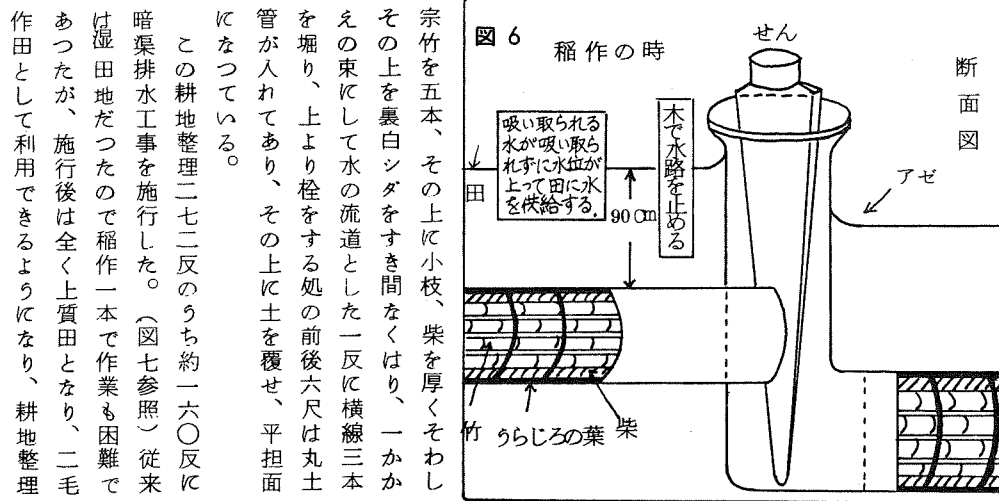


表1

	戸数	村の石高	戸数	他村分の持高	戸数	居屋敷	戸数	計
本百姓	30	石 342,823	30	石 80,254	9			石 422,849
水百 吞 姓	27	86,303	6	15,788	3	石 52,803	19	29,698
紙 屋	45					13,370	1	13,370
計	102	351,452		95,813		18,650	4	465,918

いままでは真名井の清水を中心紙漉業と黒谷の和紙の江戸時代以後の流れの概略をたどつたものであるが、次に、ではいつたいたのくらの人々が、又、どのくらの民家が紙漉業に従事していたのか、伊佐津村、黒谷村について表(表1、表2及び表3)にあらわしてみます。

(江戸時代末期 伊佐津村 職業)(文政八年)

昭和40年	
④総戸数	54
⑤手すき業者	37
⑤/④	68.5%
①総人口	250(165)
②従業者	95
②/①	38.0%(57.6%)

( )は10才以上の人口である。

表3

職業	年代	明治9年	明治10年	明治14年
紙工*		68*	67*	68*
農業		5	5	5
傘工		1	1	1
経師工		1	0	0
僧職		1	1	1
紙売		0	2	2
清酒		0	1	0
出稼		1	0	0
計		77	77	77

表2

(近代の黒谷村ー伊佐津との比較)

表2を見ると黒谷の紙漉は明治初年では、全戸数の約90%を占めていてまさに全盛といえる。

表三を見ると昭和になつた現在も68・5%とかなりの戸数をしめているが、人数的には38%とひくく兼業的なのを呈している。だが、現在もその製品は珍らしがられ、かなりの人気をあつめているようである。

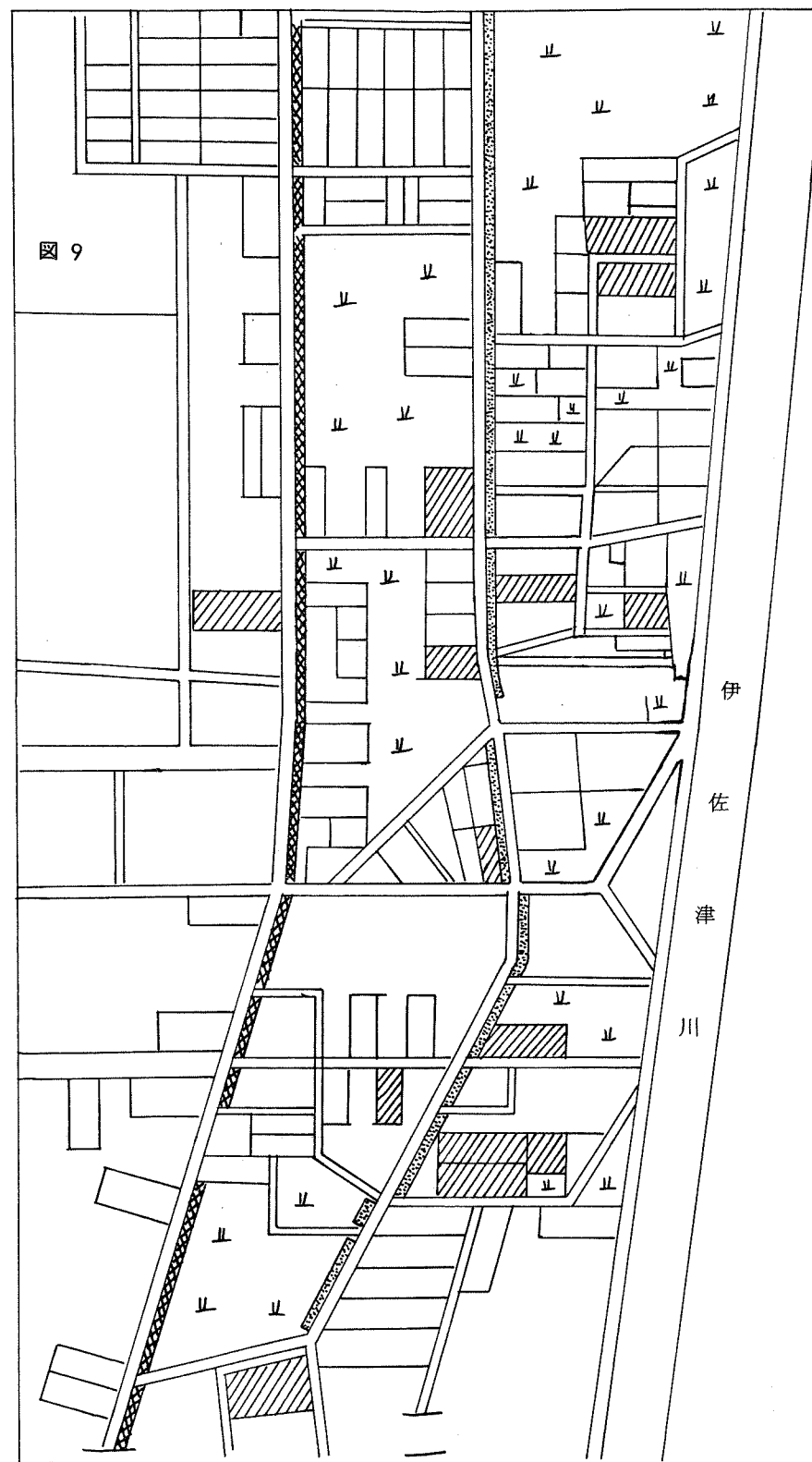
(おわりに)

以上西舞鶴の中心に流れている真名井の清水をめぐつて、様々な面から調べてみました。舞鶴に住んでいる者が、舞鶴を知らないとは思議な話ですが、実際に、この研究のように一つのことについて追求してみますと自分達の無知が暴露されたような気がいたします。

真名井の清水も数年後には、その形跡を消してしまふかもしれません。そのためにも我々の研究が後年何かの役に立てばうれしく思います。

最後にこの研究にあつて多くの方々御指導をうけたことに対して、あらためて感謝します。最後にあつて、この研究にあつたクラブ員の氏名列挙します。

部長 福田秀夫 副部長 岡野加代子  
堀 陵三 中西悦夫

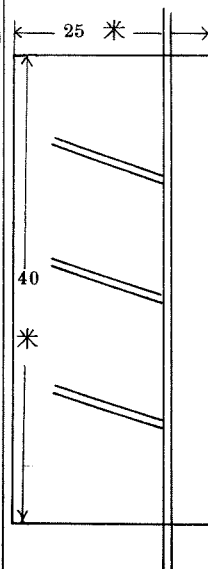


文政九丙戌正月尔  
家増政  
茂七 惣七 定八 久平 善右衛門  
長八 喜左衛門 彦右衛門

図8

一反の暗渠排水工事

25 × 40 = 1000㎡ (10R)



紙漉をやつていた家  
瀬戸川  
御水道